

第5章

新しい授業プログラムの試み

「自分を創る」発表会

よせあつめ若人



絵画
書道
写真
お笑い
カレー

映画
演劇
音楽
ディベート

主催：山形大学教養セミナー『自分を創る』運営委員会
日時：平成14年8月2日(金) 開場 17:30 開演 18:00
場所：山形市遊学館2階ホール
入場料：300円
お問い合わせ：瀧 誠志郎(代表) 電話 090-6628-6974

第5章 新しい授業プログラムの試み

1 学生参加型多人数授業

はじめに

「学生参加型多人数授業」とはかなり大げさな言い方である。北海道大学で阿部和厚氏らが実践なさっていた医学概論多人数ゼミのような学生主体型の授業を想像なさる方も多からう。しかし、ここで報告するのはそのような大層なものではない。意識すればたいがいの教師にはすぐに可能な、ほんのささやかな授業改善の実践例なのである。



報告：経過と実践

授業名：「ヨーロッパ美術史入門(芸術)」
 担当者：人文学部 元木幸一
 分類：教養教育 一般教育科目 文化 行動領域
 後期 2単位
 履修者数：148名
 (人文,教育,理,医,工,農,全学部にわたる)

この授業は通常の教養教育の講義科目である。授業内容もまったく普通の西洋美術史の通史で古代ギリシアからバロックまでを範囲としている。授業法としては、板書を中心に授業を進めるが、ほぼ毎回B4版1枚程度のプリントを配布し、さらに『西洋美術への招待』(東北大学出版局)という教師自身も執筆している教科書を使用し、その上で毎回30~50枚程度のスライドを上映する。プリントの内容は、授業の概要と文献資料の引用から構成されている。

美術史の授業なので、学生に美術作品をよく観察してもらうことが重要だとつねづね考えていたが、その意に反して、スライドを上映するために教室を暗くすると、少なからぬ学生は睡眠学習へと入っていく。それが大きな悩みであった。この授業ではスライドが一番大事なんだといくら声を張り上げても眠いものはどうしようもない。自分の学生時代を振り返っても、最前列、教師のまん前で寝ていたことを思い出す。

それゆえ注意すること以外で(人数が多すぎてきりがない)、

学生を何とか起こしておく工夫をするのが、約20年前、教師に成り立ての頃からの長年の課題だった。例えば、まめに電気をつけたり消したりする。そのためにスライド上映と、板書と、話を数分単位で細切れにする。特に気を付けたのはあまり長くスライドをつけっぱなしにしないということだった。そのような細かな作業は、大教室の構造上、かなりの肉体運動を必要とする。スクリーンと暗幕のスイッチは教室右手にあり、電気のスイッチは左手にある。スライドのピンを合わせるために最後列のプロジェクターの場所まで行くこともある。したがって、教室を前後左右にしょっちゅう移動する羽目に陥った。しかも教壇は高いので、2段の階段を上り下りする。たかが2段だが、何回も繰り返すと、ボディブローのように効いてくる。要するに、この授業は講義だが、壇上で椅子に座ってお話をなさる大先生の堂々たる講義と違って、もともと運動量の多い講義だったわけである。しかしその割に効果は少なかった。学生はいくら短い周期でも、暗くなればきちんと対応して、すやすやと眠るのである。

それを解決する方策をもたらしてくれたのは、4年前の京都大学高等教育教授システム開発センターへの出張であった。その時実施されていた大山泰宏氏の公開授業は、様々な点でわが山形大学のFD活動の出発点となるほどの効果をもたらすことになるのだが(それについては平成12年度本報告書を参照されたい。まことに歴史的な出張だった)、わたし個人にとってもショックであった。教育心理学の授業だったが、その中でさまざまな質問を学生に発し、マイクを持って学生に尋ねていく。質問内容はまさに練りに練られた凝ったものだった。学生たちは、その質問に食らいつき、教師の操るままに授業に積極的に参加していく。その様を目にしたわれわれは、愕然としたのである。そうなんです、大山先生!

けれどもわれわれには、そのような授業を自分たちが実施できるとは思えなかった。まず、京都大学教員の授業ノルマに比べてわれわれは多すぎる(これは単なる憶測にすぎないのだが)。1週間に5コマ以上もあるわれわれ山形大学の教員に、あのような用意周到な質問を毎回の授業でいくつも用意できるわけがない。さらにわれわれがやっているのは、あのような自分の生き方を考えさせるテーマの授業ではなく、それぞれの学問の知識を蓄えさせねばならない授業である。魅力は感じても、あんな授業ができるわけがないという思いで帰路について。

そうなのである。京都大学高等教育教授システム開発センターのような授業はできない。しかし教室中を動き回るあの運動だけはまねができたと思ったわけではないが、山形に帰ってからさっそく講義で試し始めた。講義中にささやかな質問を学生に投げかけて、答えさせようとしたのである。まずは学部の専門教育の講義で始めた。なじみの学生が多い方が、素直に答えてくれるかと思ったのである。だが、そうはならなかった。まず学部ではマイクのない教室だったので、学生の答えが全然聞こえなかった。また、学部の授業はかなり高度な内容になるので、学生が答えられそうな質問がなかなか出てこなかった。

さらに何と言っても学部の講義は自分の考えをしゃべりたいという教師の側の(というより研究者としての自分勝手な)欲求が強かったのである。質問をする余裕がなかった。

そこで今度は教養の授業で、広い大教室中をマイクを持って歩き始めた。運動量のもとと多かったので、それほど違和感を感じなかった。スライドを映したときには極力質問するようにしたのである。授業日の徒歩通勤時間約30分は、質問を考える時間となった。これが意外にうまくいった。授業のアンケートでもそうだが、1年生の方が素直に質問に答えてくれる。非常に「くいつき」が良いのである。それに質問は極力知識を問うようなものではなく、スライドをよく見れば分かること、あるいは感じたことを聞くようにした。そして同じ質問を何人にも繰り返して聞くようにした。あるいは、例えば全員に『モナ・リザ』のコピーを数点見せて本物を当てさせ、全員に手を挙げさせたりした。このように個別的にマイクで聞いていく方式と、全員に問いを発して手を挙げさせる方式、そしてその両方の組み合わせで、講義授業の中でも学生との相互交流を深めていった。

その結果、スライド上映時に寝ている学生はひじょうに減少した。学生は、以前よりははるかに積極的に授業に参加しているように思う。その証拠に、出席カード裏面の感想コーナーには、多種多様な質問、意見が書かれている。毎回紹介し、解説を加えるのがたいへんなくらいなのである。

要するに授業中にマイクをもって教室をウロチョロし、学生に質問を発すること、出席カードの裏面に質問・意見カードにして、その質問・意見を次回授業冒頭で口頭で披露し、質問には答えること、これが「学生参加型」といえるたった二つの方法なのである。

ちなみにこのような授業は「ヨーロッパ美術史入門(芸術)」に限らず、教養教育のどの授業でも実践している。だが、あいかわらず学部の講義は、一方的に話すことが多い。

問題点の指摘と結果

このような授業方式にはいくつかの問題が指摘されよう

一つは講義の流れを寸断して、スムーズな講義とはならないのではないかと。これは、2年前に三公開授業をした際に検討会で指摘された問題である。しかし、スムーズな授業とはなんだろうか。いくら流暢に話を進めて「名講義」をしたとしても、学生に理解してもらえなければ本当の意味での名講義とはいえないだろう。流れの寸断は、むしろ学生に考える機会やノートの機会を与えることになると考えられないだろうか。流暢な授業はえてして一人勝手な授業になりやすいと思うのだが。

第二に、これが根本的な問題なのだが、学生への問いかけを増やすことで、明らかに講義の進度が遅れるようになったことである。したがって以前に比較して授業の総情報量は減少しているように見える。実際、昨年度からは授業内容を精選するようになってきた。ただ、いくつかの公開授業の経験によれば、学生評価の高い授業ほど情報量を精選していることに気づく。経済学のT氏、言語学のI氏の授業がそのような授業である。精選した内容を、丁寧に分かりやすく学生にぶつけていく。彼らの授業はそのようなものであった。つまり100の情報を学生

に与えて、50しか理解してもらえないよりは、はじめから80の情報量に限定し、それを丁寧に与えることで70理解してもらう方が、実際はすぐれた授業といえるのではないだろうか。この情報量の精選と進度の問題は、ひじょうに難しいが、今もっとも真剣に考えねばならない問題であるように思われる。要するにバランスの問題である。

第三に質問票に関して。わたしが行っているのはかなりずさんなやり方であるということ。例えば、ひじょうに素晴らしい授業をしている氏の講義では、毎回全質問とそれへの解答がプリントにして配布されている。その努力には頭が下がる思いである(本当に授業に割り当てている労働量はものすごいのだ)。しかし、それは誰にでもできることではない。わたしはうーん、ちょっと無理かな。確かにI氏の方法だと、そのために授業時間は消費しないので(配布の時間のみ)、効率的である。だが、本授業のように授業冒頭で披露するのに比較して、質問や意見の共有はどの程度できるだろうか。個人的に納得するだけに留まるのではないだろうか。また学生はプリントされたものをどの程度読むのだろうか、疑問無しとしない。多少時間を使っても(10~20分)授業中に披露することで学生の側に、同じ授業を共有しているという意識が生まれるのではなからうか。耳から聞くことで、「へえ~、こんなことを考えている人がいるんだ」とか、「わたしも同じ疑問をもっていました」というように感ずること、考えることが重要なのではないかと思う

ただし、ここでもまた消費時間と授業進度のバランスの問題が出てくる。毎授業でこのような時間を使うとすると、授業中の情報量がますます減少する。したがって、今のところ、このような出席カード(質問票)は、15回の授業で数回におさえている。

さて、このような手軽な授業改善で学生の評価はどのように変わるのだろうか。昨年度(平成13年度)の本報告書を見ていただきたい。後期授業で履修者数が100人を超えた多人数講義中、「コミュニケーション平均」の項目で4.0を超えたのはわずかに2つだけである(少人数授業でこの項目の点が高いのは当然である)。そのうちの一つが287人履修のわたしの授業である。明らかに学生には好感をもって受け入れられている。ちなみにもう一つは112人履修の「化学」の授業。総合点はこちらの授業の方が高評価である。どのような授業なのか一度見学させていただきたいと思う



三 公開授業・検討会

以上のような「ヨーロッパ美術史入門(芸術)」を対象として、数人の本学教員と新潟大学農学部教員の教員とで公開授業を行った。以下がその検討会記録である。アンケート記録は、第4章に掲載した。

実施日：平成15年1月24日(金) 1・2校時 8:50~10:20)

参加者：人文学部教員3名、教育学部教員1名、
理学部教員1名、新潟大学教員2名、
学務部教務課1名

出席学生：97名

(三) 公開検討会記録)

授業者：元木 幸一

参加者：人文学部 本多 薫
教育学部 小田 隆治(同会,教師観察)
理学部 櫻井 敬久(学生観察)
新潟大学農学部 森井 俊広
箕口 秀夫

列席者：学務部教務課教育企画係 蜂屋 大八(記録)

(櫻井) 私は、学生がどう反応しているかの観察を担当した。一番感心したのは、3年前と比べて、みんなちゃんと聞いていること。授業に集中できている。また、それなりにメモを取っていた。3年前はなかなか自分からは取らなかった。寝ている学生は3人どしなかった。

もう一つは、携帯電話。前の時は、机の下で見えていたが、今回はほとんどいなかった。内職をしていたのは3人くらい。ただし、黒板のことはメモしながらだった。ずっと内職している学生はいなかった。遅刻者がパラパラいた。一番遅い学生は、10時10分頃だった。一番後ろの一人は、望遠鏡でスライドを見ていた。

途中、一人の学生が資料を取りに行ったら、バラバラバラっと数人の学生が取りに行っていたが、あれはどう判断したらよいのか分からない。

集中力をずっと持続させるのは無理。女子学生が2人並んで座っているところでは、授業の半分くらいの時と、一番最後に私語が出ているようだったが、全体的には、非常に集中していた。



(小田) 私は教官の観察を担当した。8時45分には教室に来てスライドの準備等を始めていた。そうしないと、授業開始の8

時50分から授業を開始するのは無理であろう。きちんと対応していた。8時50分には、学生は35人しか来ていなかったが、大雪のせいではないか。

授業開始のブザーとともに、プリントと出席カードを配布し、試験の説明等を始めた。この時点ではマイクの音量が小さいのが、気になった。

(元木) 胸に付けたマイクの向きではないか。

(小田) 最初の方は、聞き取れないくらい早口だった。試験の説明と、質問への対応をし、9時から本題に入った。質問への対応の際に、「これは非常に良い質問です。」と励ましていたが、これは良いこと。学生は、読まれると喜ぶ。このように励まされると、「次は自分が」となる。答えられない質問には言い訳をしていた。誠実さが伝わった。

板書は大きくて良い。9時5分から本題に入ったが、すると、口調がゆっくりになり、マイクの入り気にならなくなった。9時10分頃から、人口問題等、話に物語性が出てくると聞き入る。「資料を見てください。」という言葉など、終始やさしさがある。言葉の丁寧さは大切だと感じた。また、以前、立松先生の授業を見た時に学んだ、黒板に縦線を入れることを良く実践していた。

携帯電話への注意は、いつもやっているのではないか。学生の方で注意している。厳しく注意したから聞くというのではない。昔と違って、切っておくことを覚えたのではないか。その分メールをやるが、それもいない。

9時28分スライド開始。照明ダウン。この装置は、学生アンケートの結果を受けて付けた。授業改善の一環である。マイクを持って、学生に質問をしていた。学生との双方向性を、多人数の中で実践していた。ピサの斜塔のスライドを見せて、「これを何とか」という質問した際に、答えを聞いた学生が「ハー」と言う。それに対し「ハーじゃない」と言う。非常に臨場感があった。知識や興味がないのに、導入していくのは難しい。そこから、「ピサの斜塔に昇ったことがある人？」「はい、私。自慢」と軽い話題になった。

9時48分照明を付けて板書。こまめにやっている。9時54分から「ロマネスク彫刻」の項目に入る。「弊の原理」は面白いので学生も興味を示したが、「文様の弁証法」の方は、「弁証法」ということを知らないのにも関わらず、「例示が多かったのだからではないか。もう少し説明が必要ではないか。授業中に学生に当てて見事に正解したとき教師の側から「すごい！」という発言があったが、これは生の声で良かった。

10時16分、出席カードを回収し、授業終了。後かたづけと休憩を取ることを考えれば、許される時間ではないか。

(元木) 授業をまじめに聞いているのは、3年前より履修者が少ないことも関係しているのではないか。また、後期に履修する学生は、たいてい興味強い学生である。

早口になっているという指摘については、確かにそうかもしれない。きちんと説明したい部分はゆっくり話している。

「弁証法」については、もう少し説明を加えるべきであった。

(本多) 公開授業には始めて参加した。良かったのは、前回の学生の質問に答える点。自分の授業にはない。

一つお聞きしたいのは、質問が多かった時、その質問に答えるかをどのようにしてピックアップしているのか。また、「この

質問は前回答えましたが...」と前置きして、前回の授業の重要点を振り返っている。

私が気付いたのは、ノートの取り方。黒板のことはノートに書き、口頭での説明はプリントにメモしていた。

また、シラバスで「なるべく前列に座るように指示されていたが、実際に後ろに座った学生に対して、「もっと前に座りなさい」という指示があっても良いのではないか。自分が学生の頃、教室の梁より先に座らなないと評価しないという教官がいたが、こういうことだったのかと思った。

非常に参考になったのが、スライドの提示方法。提示しっぱなしではなく、ポインターできちんと指しながら提示するのは、良かった。

(森井) 出席カードの回答を、20分ほど口頭でされていた。学生は来たばかりでボーっとしている。その後板書、更にその後スライドと、授業の中で盛り上がりを作っていると感じた。

(箕口) 久しぶりに講義を受けて、もう一度教養を学びたいと思った。90分の授業に、どうやってメリハリを付けるのか。ズーッとスライドばかりではなく、アクセントを付けていた。自分も試してみようと思う。大きな教室では、なかなか双方向になりにくい。その改善の一つが質問カード。また、自分自身が学生の中に、積極的に入っていく。明日の授業から、早速試してみたいと思った。

自分も出席カードを取っている。疑っている訳ではないが、10時過ぎに入ってきた学生とまじめな学生を同一に扱って良いのか、共通の悩みだと思いが、疑問が残る。

また、入口に公開授業と書いてあり、教室の中には我々が座っている。それにも関わらず、目の前で私語、メールをやっている。私にはとてもできない。学生はすごいと思った。

(元木) 出席カードは、非常にずさんな取り方をしている。この前は、9時45分頃に配ってすぐ回収した。少ないが時々意地悪をしている。しょっちゅうすると、こちらも疲れる。出席点は、20~25点くらいにしている。他の教官で、筆跡鑑定をしている人もいる。ノート大の紙、一人一枚に書かせている人もいるが、配るだけで時間がかかる。

(小田) 私は、出席カードの裏に5回書かせている。このうち3回書かない学生は試験を受ける資格がないといっている。授業途中での入室は不愉快なので、「もう、あなたにはあげない」と言っている。これを2~3回続けるとやらなくなる。5回書かせて、良いものを読み上げている。中には、「ただ面白かった」と書いてくる学生もいる。この場合、「学部名を読み上げて、ただ面白いはないだろう。きちんと考える」と言う。

学生アンケートをとってから、授業態度が良くなった。授業全体が良くなったためではないか。かなりの教官が工夫している。個人的な努力だけではない。

(櫻井) 昨年教養セミナーを担当したが、人数が少ないので出席の問題はなかった。専門の授業では、名簿に を付けさせている。出席点は20点なので、出席だけで単位は取れない。本人が損をするだけではないか。

(本多) 私が担当している情報処理では、履修者が50人である。授業開始から30~60分後くらいに、私が回って、一人一人に出席カードを渡している。遅れた人はカードをもらえない。専門の授業では、マスの入ったA4の紙に書かせている。30人

くらいなので十分である。

(小田) 森井先生は、新潟大学で初めて公開授業をされた。

(森井) 受講生は、ほとんど顔が分かる。私の授業では、レスポンスカードを使って、自由に記載させている。

(小田) できるできないではなく、出席の確認に時間を取られたくないだけ。

(元木) 私は、出席カードと質問を授業後すぐにチェックして、終わるのはだいたい昼ご飯になる。能率的にやっているつもりだが、それでも、「授業のために時間がかかりすぎる」という教官もいる。

(小田) 「教室サイズ」はとても大切にしていかなければならないと思った。場合によっては、教室変更も必要ではないか。

(櫻井) スライドを映すスクリーンは、大きくした方が良い。その方がインパクトがある。投資が必要ではないか。机、椅子も、もっと良いものにする必要がある。

(小田) 学生アンケートが重要。「暑い」「息が苦しい」という要望に応じてクーラーを入れた。うちの大学では7月末まで授業がある。ものすごい暑さである。暑さは騒音と同じ。入学者がすぐに受ける教養教育の授業を重視し、まずは教養教育の教室に投資しようということになっている。

(箕口) 我々のミッションは、システムを見てくることだったのに、検討会の中に入ってしまった。

(小田) 私達が京都大学の公開授業を見に行った時にも、いきなり公開検討会に入れられて、話をさせられた。

FDはチームでやらなければならない。そういう意味で、事務にも入ってもらっている。

(箕口) 我々の所では学科で取り組んでいる。興味ある人はやるといったレベルである。こうすると、本来必要な人が入ってこない。オフィシャルな委員会で強制的にやる必要がある。

(櫻井) 理学部では自己評価委員会がFDを担当している。学科レベルでは、FDに関する様々なメニューがあるので、全教官がどれか一つに出席することになっている。

(小田) 強制力が必要だが、大切なのは、目標を達成すること。継続性があること。それが転げないようなシステムにしなければならない。全員一回は出ることが目標ではない。参加したら終わりではない。山形大学では、意識改革、啓蒙活動については達成したと言えるのではないか。



(森井) ミニ公開授業は、どのようにしてスタートしたのか。

(小田) 授業を常時公開しています」ということを掲示して、不特定多数の人に呼びかけても来なかった。だから仲間内で参観し合う「ミニ公開授業」を多数できれば良いのではないかと考えて編み出した。人文学部の法学教官たちのように、我々の知らないところで、自主的にミニ公開授業がなされてい

る。この方式が、全学に広がりがつある。

公開授業は、他人の授業を直してやろうというものではない。他人の授業を見て、自分の授業を直していくものである。私がやってくれと言えばやってくれるだろうが、それで良いのか。すごいのは、今回、ドイツ語で3科目のミニ公開授業を行ったこと意識が変わってきている。

「1年に一度は、他人の授業を見よう。3年に一度は、自分の授業を公開しよう」というのを目指してやっている。我々の所では、年限を切って目標を設定しなかった。これからは習慣づけなければならない。その意味では、転機を迎えている。

(櫻井) 新潟大学では、教養教育のFDは行われていないのか。

(箕口) 一般的な研修会、シンポジウムと、一方向的なものばかりである。

(元木) そういう内容のものは、もう要らない。

(箕口) 本学では、歯学部にてFDに対して一生懸命な方がいて、プロダクトのあるワークショップ形式のFDにしなければならないと言っている。

(森井) 山形大学では、PBLは話題になっていないのか。2～4年では、知識の習得は無理ということを前提にして、基本を教えて、残りは卒業後に自分で学ぶようにというもの。教育は、PBLを入れると割は減る。

(小田) 大学教育学会の研究集会でも、自己学習能力の向上が話題になっていた。情報量が肥大している。卒業後、すぐに実践というほどの知識は無理。高大連携で、どこまで下に下ろしていけるかということではないか。学生に、部屋を確保して、様々な形でケアしていく必要がある。

(元木) 非常勤で行って来たばかりの新潟大学では、日曜日でも10時まで図書館が開いている。学生の利用する部屋はしゃれている。とても良いことだと思った。

(櫻井) 今日の授業は大学でなければ聞けない。それ以降の部分は、図書館でということだろう。

(小田) 講演型の文系の講義は理系とは異なる。全部ひっくり返す訳にはいかないだろう。



2 少人数教育による学生主体型授業

はじめに

日本の大学は、18歳人口の半数近くの者が高等教育機関に入学する「ユニバーサル段階」に達した。大学が「ユニバーサル段階」に突入したことによって、大学の基盤を大きく揺るがせることになった。現在、大学に投げかけられている問題の多くは、この点に収斂すると言っても過言ではない。だが、時代を「エリート段階」に戻すことはできない。すべての国民が高等教育を受けることができる社会は、それ自体素晴らしいことであるのだから。

大学の大量化をもたらした成熟した社会では、多くの若者たちはあらゆることに対して無気力・無関心になっている。「ユニバーサル段階」の大学では、そうした無気力な若者たちが、大学に入学してくる時代になった。大学を伝統的な「学問の府」として、そうした学生を無視したり、そうしたことは高校までに身に付けておくことで大学の任務ではないと、切って捨てることはできない。我々の前には、すでにそうした学生が少なからずいる。

学生のなかに眠っている意欲や関心、やればできるという意志を引き出したい。それは、間接的にではあっても、その後の学問の修得や人生の歩みにきつと役立つはずだ。こうした願いと確信を込めて、私(小田隆治)と人文学部教授の立松潔氏は、昨年度に実験的に学生主体型授業「自分を創る - 表現工房の試み - (教養セミナー)」を開講した。この授業は多くの成果を得、その成果を昨年度のこの報告書(山形大学教育方法等改善委員会「教養教育 授業改善の研究と実践 平成13年度山形大学教養教育改善充実特別事業報告書」、2002)や東北・北海道地区大学一般教育研究会(小田隆治「学生創造型授業『自分を創る - 表現工房の試み -』の実践と研究」、第51回東北・北海道地区大学一般教育研究集録、67-73頁、東北・北海道地区大学一般教育研究会、2001)において報告してきた。この授業にはっきりとした手ごたえを感じたので、本年度、さらに学生主体型授業の研究を深めるためにこの授業を再び開講した。

山形大学の教養教育の授業には、「自分を創る」とは違った授業スタイルで学生に意欲を喚起することを目的とした少人数セミナーが存在する。その中の一つに、学長自らが企画した授業がある。それが『ようこそ先輩 - 先輩からのメッセージ(教養セミナー)』である。学長は以前から学生と密に接触する機会を持ちたいと願っていた。こうしたことを医学部免疫学・寄生虫講座の荒木慶彦先生に相談したところ、山形大学の卒業生のなかで各界で活躍している人達に話をしてもらって授業を行なったらいいのではないかと、という提案をもらった。そこで3人の若い事務官(蜂屋大八、樋口浩朗、鳥前貴志の3氏)の協力の下に、上記の授業を開講する運びとなった。授業は、先輩の話、学生による話の記録、先輩との議論から構成された。こうした先輩や学長との触れ合いや議論を通して、山形大学に入学した意義を学生が自問自答することによって、これからの

山形大学の学生生活が充実するものになることを狙った授業である。

山形大学は、いわゆるブランド大学ではない。山形大学に入学して誇りを持っている学生は、そう多くはいないだろう。だが、それではいけない。別に下手なプライドを持つ必要はないし、愛校心を強制する必要もないが、自分の大学に誇りを持たない学生を輩出する大学は存在価値がないだろう。大学への誇りは在学中にじっくりと育まれることが理想だろうが、現在まで自然とは育まれてこなかったことも、現実として受け止めなければならない。大学としては、教育現場のなかで目に見えるかたちで山形大学に対する誇りを持つ機会を与えていかなければならない。学長の授業はまさにこうした授業として位置付けられる。

『うこそ先輩 - 先輩からのメッセージ (教養セミナー)』と自分を創る - 表現工房の試み - (教養セミナー)』の二つの授業について述べていく。前者の授業の詳細については、ホームページ (<http://kbhp.kj.yamagata-u.ac.jp/gakucho/senpai/main.html>)でも紹介されているので、そちらを参考にさせていただきたい。また、後者については、「学生主体型授業の実践は学生と教師の意欲を高めるか」(小田隆治 第52回東北・北海道地区大学一般教育研究集録、東北・北海道地区大学一般教育研究会、2002)に発表したものを、一部加筆訂正したものである。

『うこそ先輩 - 先輩からのメッセージ - (教養セミナー)』



学長が、在学学生を相手に講演をすることは他大学にもあるだろう。だが、15回の授業を丸ごとする学長はほとんどいないだろう。それをする仙道学長の教育にかける並々ならぬ熱意はたいしたものである。それだけでも、この授業は全国に誇れる授業なのである。

シラバスは次のような書き出しで始まっている。「山形大学に入学したものの、ここがどんな学舎なのか、その実像を把握しかねている諸君も多いのではないのでしょうか。この授業では、山形大学を卒業した後、各界でエネルギーに活躍する先輩を招き、後輩達へ熱いメッセージを伝えてもらいます。各界の前線で活躍する先輩方のパワーに、若いパワー、素朴な疑問をぶつけてみませんか? このようなセッションに参加することは、山形大学の学生としての「Identity」を確立するための、またどない機会になると思います。このように山形大学に入学したばかりの学生に、誇りを持ってもらいたいという願いが溢れているのである。シラバスの中で成績評価の方法は、出席・感想文:70%(積極的に参加することが必要です)、講義録:30%(各担当班ごとに取りまとめます)」と明示されている。

授業の企画は始めに述べたように学長自らが行なったが、講師の人選や授業の準備は事務官が協力した。多忙な学長のせいもあって、後期に設定された授業は、変則的な時間割だった。それは、金曜日に3・4校時と9・10校時の2コマを使い、それを8週間に亘って実施したのだ。第1回目は授業のガイダンスで、それ以外の7回が先輩との話し合いであった。講師となる先輩は毎回違い、シラバスにはそれぞれの講師の名前が記されていた。

講師人は以下のとおりである。

(第1回 10月4日(金) 学長によるガイダンス)

出張先の熊本大学からSCS氏による配信)

回	月日	現職	氏名	卒業学部等
2	10/11	山形ベンチャーマーケット代表	稲葉 裕氏	人文H12卒
3	10/18	山形新聞社記者	古頭 哲氏	人文H2卒
4	10/25	山形大学「ソフィ」クラブ代表	小山清人氏	工 S42卒
5	11/8	木村九郎右衛門農場代表	木村 充氏	農 S63卒
6	11/15	阿部クリニック院長	阿部憲史氏	医 H3卒
7	11/22	文部科学省大臣官房会計課	島田正寛氏	人文S51卒
8	11/29	テレビユー山形	松田明子氏	教育H3卒

3・4校時には、その回を担当する先輩から1時間、現在の活動状況、大学時代の経験、後輩への想い・メッセージ等を話してもらった。残りの時間に、学生に講師の話の感想や質問事項を書かせた。昼休みに、あらかじめ割り当てておいた講義当番の数人の学生と講師が食事をとめながら、質問票を見て、後半の議論の進め方などについて話し合った。9・10校時には、前半のレポートを基に、講義当番である学生の司会で、先輩と学生で議論を行った。そして学生がその記録をとった。授業終了後、当番の学生たちは、議論の内容を講義録としてまとめた。講義録は、学長のホームページから公開できるようなスタイルでまとめられた。当番以外の学生は、当日分のレポートを次回までにまとめた。

やはり先輩の話は学生たちにとっても刺激的であったようだ。ここに学生や講師そして学長の言葉を少し拾い上げてみよう

第2回

- ・残された大学生活、生かすも殺すも自分次第。山形大学を誇れるようになってほしい。(講師)
- ・将来のビジョン、それは他人がどうにかしてくれるものではなく自分自身が変わらなければつかむことのできない、そんなもののような気がします。(学生)
- ・自分の計画を立てていきたい。(学生)
- ・自分も、人材育成をやってみたくなった。中国でも発展させていきたい。(学生)
- ・自分を成長させるのもしないのも自分次第だと感じた。(学生)
- ・自分からなにかをやっけていこうと思う。行動を起こしていきたい。(学生)
- ・苦しくてもがんばれる!という話をきくことができ、上を目指す姿を常に抱きながら、がんばっていきたい。(学生)
- ・今できることを、120%やりたい。そして、1日1日できることをみつめていきたい。(学生)

- ・自分も輝いた、情熱を持った25歳になりたい。稲葉さんのように、いい言葉を日記に書き留めておきたいと思う。(学生)
- ・人のつながりをもっと大切にしていきたいと思った。友達など、自分の宝物になるとおもった。もっと、友達を大切にしていきたい。(学生)
- ・稲葉さんは、みなさんの質問に対して、きちんと答えるすべをもっている。これからの世の中で必要になってくるのは、そういった能力、サマリーというものである。いかに短い時間で自分のいいことをいふか。いかに表現するかということが問われるようになってくる。そんなことを身につけてほしい。(学長)

第5回

- ・また木村さんの言葉で深く心に残ったのが「自分の将来だけでなく、自分の住む社会(職業)の将来も視野に入れて生きて欲しい。」というものでした。(学生)

第6回

- ・みなさんの夢は何か?(講師)
- ・ロックンローラー。
- ・人間的成長を求めて行きたい。
- ・教師になりたい。高校時代の先生には、職業の幅が広がる工学部を勧められてそうしたが、まだ諦めていない。
- ・楽しい人生。
- ・エンジン関係。
- ・スポーツ関係。
- ・映画の宣伝の業界に勤める。『情熱大陸』に出る。外国のインタビューを受けたい。
- ・フランス、カリフォルニアの山を買って、ロッジを作ってスキー場などを経営したい。
- ・コンピュータ関係。
- ・機械の分野で有名になりたい。
- ・心理学、英語、フランス語を学んで外国で暮らしたい。
- ・国際関係学を学びたい。家族を大切にしたい。
- ・死ぬときには、充実した人生だったなあと感じるような生き方をしたい。

第8回

- ・僕は今、将来のこともあまり考えずになんとなく大学生活を送ってしまっているの、目標に向かって努力する松田さんの学生時代を見習いたいと思いました。
- ・アナウンサーとはブラウン管の向こうで、ただ視聴者に出来事を伝える仕事だと思っていたけど、今日の話聞いて、他にも色々していることを知って大変な仕事だということを知りました。
- ・自分も、夢を夢だけで終わらせないよう努力しようと思いました。思うだけでなく、実行したいです。
- ・僕の周りには尊敬する人は多いです、松田さんのおっしゃるとおりその人達から学ぶことは多いです。



本授業の「学生による授業改善アンケート」を見ていこう。アンケート結果から、この授業は学生から高い評価を得ていることがわかる。具体的に設問項目のいくつかを見ていくことにしよう。設問4の「この授業を意欲的に受講しましたか」の評点は4.45と学生の強い意欲が感じられた。こうした学生の高い意欲は、少人数セミナーだから当然だろうという人がいるかもしれないが、始めはその授業を楽しみに来ていた学生も、授業がつまらなければ回を重ねるごとに意欲を失い、授業から離れていってしまう。この授業では始めに履修登録した学生のうち履修放棄した学生はいなかった。やはり、意欲を掻き立てる授業であったのだ。

設問6の「考え方、能力、知識、技術などの向上に得るところがありましたか」では、評点は4.86と非常に高い得点だった。こうしたことは、毎授業の学生のコメントからも推し量ることができる。設問10の「教官の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか」の評点は、4.77と、これも高い評価であった。少人数セミナーでこの設問の評点が低いとその存在意義を疑われることはあるが、この授業は十分双方向的であったのだ。

設問11の「授業方法の工夫」は、やはり4.81と高い評価を得ていたが、その具体的内容の「設問13の教科書の指定・推薦や参考書などの情報提供は適切でしたか」と設問14の「版書やOHPなどの資料提示は見やすかったですか」では、それぞれ3.81と3.68と他の設問に対して低かった。この授業のスタイルから言って、教科書などを使っていないことは確かだが、講師によっては推薦図書などを薦めているのでこれほど低い評価をされなくてもいいのだろうとは思うのだが、また、講師によってプリントを使ったり、パワーポイントを使ったりと、その発表方法は様々であった。そして、講師の中にはそうしたことに慣れていない方がいたかもしれない。こうした民間の方々を講師として頼む場合は致し方ないことであろう。こうした授業の細部の不満は若干あったとしても、この授業全体は学生から高く評価されている。それは、設問17の「総合評価」が、4.86という高得点を得ていることから明白である。

「アンケート」の自由記述欄に書かれたものをいくつか掲載しておこう。

- ・いろいろな話を聞くことができ、自分自身、人間的に成長できると感じる場所が多かった。本当に自分が楽しむことができ、学ぶことができ、良かった。様々なところで働く先輩方と出会えたこともとても大きかった。楽しい授業でした。
- ・もっと受けた学生が主体となって、ディベートを進めたかった。もう少し長く授業をやっていたら、学生同士が仲良くなり、ディベートができる状態になったかもしれない。
- ・教室は少し狭かった。
- ・またこんな授業があったらいい。今後も、学生主体の授業があり、多くの人に会えるのなら、なお良いかもしれない。
- ・この授業を通していろいろな人たちが、それも第一線で活躍している人たちが、それぞれの分野の話をするのが、とても勉強になった。この授業で「先輩」から、人生の勉強をさせてくれる。人生と仕事、それぞれの「天職」とは何なのか、よく分かった。
- ・先輩方に直接話を伺って、大学生活とこれからの将来の参

考になった。

- もっと先輩や社会人の方々に来ていただいて話ができる授業を増やしてほしい。一般教育に係らず、専門などでもできれば、どの学部の人もとれるような。
- 直接、先輩方とお話できて受身の講義ではないところがとても良かったと思います。
- すごくいろんな人の話を聞いて本当によかったです。樋口さんに講義をとるとき、「とった方が絶対にいい」と説得されて、それが本当だったのでなんとなくやさしかったです。
- みんな仲良くなれるように3回目終わったくらいでなんかコンパとかした方がよいと思った。
- 来年もした方がよいと思いました。
- 工学部でもやいませんか？
- 得るものが大きかったこと。
- いろいろと人生の勉強になりました。自分の生きる道で素敵な道が開けそうです。
- 出欠があいまいではないでしょうか？
- たくさんの先輩の話を聞いて、自分の知識も増えたと思う見習いたいと思う点多かった。自分以外の学生の考え方を知りたいチャンスだと思った。
- 学長があまり授業にいなかったのは残念。
- これからもこのような授業があってほしいです。



本授業の第6回目に「公開授業 & 検討会」を実施した。当日の講師は阿部クリニック院長の阿部憲史氏でタイトルは『わが車イス人生 - 挫折と再生』であった。授業の参加者には阿部夫人、仙道学長、ならびに協力事務官の蜂屋、樋口、駒谷の3氏がいた。授業参観者は、立松潔、中村三春、小田隆治の3教官であった。アンケート結果については前の章をご覧頂きたい。アンケートと重複する部分もあるだろうが、この授業を参観しての感想を述べておきたい。

この日の授業は、障害者という重いテーマの下にあって、精神科医、夫婦愛、と学生の興味を引く盛りだくさんの内容であった。こうした感動を呼ぶ授業を通常の授業で組み立てることはほとんど不可能に近い。山形大学のすべての学生に聞かせたいような内容であった。

小さな教室で講師との距離が近いことはとてもいい。講義の間中、学生は講師の話真剣に聞いていた。当時医学部生だった講師が学生時代にラグビーで事故に遭って障害をおったときに、山形大学が柔軟な対処してくれたことを誉めてくれたことはとても嬉しかった。

一人一人の学生のレポートに学長自らが感想を書き込んでいるのはいいことだ。だが、10月11日のレポートが1ヶ月後の

11月15日に返却されるのは遅すぎるのではないだろうか。少なくとも、1回目のレポートは次の授業に返却したほうがいだろう。授業の開始当初から学生は授業者に見守られていることを意識できるからだ。学生に速やかに対応することで、精神的な側面からも授業は双方向的になるだろう。

この授業は、主に講師の話とそれを基にした講師と学生の話し合いで構成されている。こうした授業の性格から、授業担当者の学長は授業を進めていく実質的なリーダーではない。それは学生主体型授業として組まれているために致し方のない面もあるが、それかと言って授業に学長の顔が見えないならばこの授業者が学長である必然性はないし、学長がするという付加価値もない。折角、毎回授業に出ているのだから、学長はもっと前面に出て、話に加わってもいいのではないか。この授業に参加する学生は、先輩の話を聴くと同時に、学長の生の声も聴きたいのだ。

上記の理由から、この授業は7回すべてが講師の話でなくてもいいだろう。4回目あたりに講師なしで、学長と学生でこの授業を通してどのように成長したか、思い出に残っている話は何か、を話し合った方がいだろう。

学長には、これからも是非ともこの授業を続けていただきたい。そして、この授業が山形大学教養教育の看板授業に発展することを切に願う。

自分を創る - 表現工房の試み - (教養セミナー)」



学生主体型授業「自分を創る - 表現工房の試み - (教養セミナー)」は、教養教育の一般教育科目の総合領域に位置付けられ、前期の水曜日の4コマ目に全学部の主に一年生を対象として開講した2単位科目である。

シラバスは、入学したばかりの学生にとって授業を選択するうえでの唯一と言ってもいい情報源である。本授業のシラバスは「若いエネルギーがかたちになる」で始まっている。それについて「自分を創るうではありませんか。具体的に何をするの？」それは自分で考えてください。演劇・映画制作・ビデオ作品・コンサート・FM・小説・絵画・ホームページ作成・自由研究とにかく何でもありです。あなたの意欲とアイデアと行動力したいです。何をしたいか考えてきてください。それが具体的に可能かどうかを議論し、実現へ向けて何人かでチームを組んでもらいます。それから発表会を行い、その評価と反省会を行います。このセミナーにはお金も機材も知識も準備されていません。無責任なようですが、こうしたこともあなたたち次第

です」と、書いている。

シラバスに書いた授業目標は、「リーダーシップ、コミュニケーション能力、協調性、討論力、発表力、責任感、能動的行動力、企画力、知識発見、社会性、自己発見、問題解決能力の育成」である。成績評価の欄には、「出席30%（毎回出席とります）、授業への取組30%（役割の作業量と、授業への発言内容や回数です）、作品40%」と記入している。

こうしたシラバスを読んで、授業のガイダンスに50名近くの学生が集まった。最初に、かれらに対して、シラバスを読んできたかどうかを確認した。次に、昨年度の学生たちが発表会のために膨大な時間を費やしたことなど、この授業の大変さを説明した。だが、学生は去らなかった。それから、学生たちに自己紹介と実際にやりたいことを順番に言わせていった。ほとんどの学生たちには具体的にしたいことがあるわけではなかった。この授業に参加すれば何か楽しいことがあるのではないかと、いうぼんやりとした期待感があるだけだった。再度、この授業が膨大な時間と労力を費やすことを学生に告げ、残った全学部にわたる40名近くの学生の履修を認めた。ほかに、単位にはならないが、昨年度の受講生2名がこの授業に参加することになった。



初回の授業でグループ編成を行った。一人で作品作りを行うことはあらかじめ禁止しておいたので、詩や写真、絵画を制作する学生は「総合芸術」という一つのグループにまとめた。教師側からは立松潔氏が「ホームページの作成」と「ディベート劇」を準備し、その内容を説明した。前者は立ち上がらなかったが、後者は当初2名が名乗りをあげ、その後人数が増え発表会までこぎつけた。ほかに、「ビデオ映画」、「演劇」、「音楽」、「カレー」、「お笑い」、合計7つの班ができた。



作品作りは授業中には一切おこなわず、放課後や休日に勝手に行なうことになっていた。毎回の授業はひたすら作品制作の中間発表と、それに対する批評会から成り立っていた。こうしたことは、シラバスの中にも書いておいたし、ガイダンスでも繰り返し説明したことであった。

毎回の授業には、学生のなかから司会者2名と記録係2名をたて、かれらを授業運営の中心にすえた。司会は授業時間内でたくさんのごんごんをこなしていかなければならなかった。発表会の準備のためには、授業時間内で決めなければならないことがたくさんあった。ただ議論をすればいいわけではない。発表会のチケットの値段を決めるなどの、具体的に決めていかなければならないことが山のようにあった。学生はこうしたことにまったく不慣れだった。議論はしばしば空転し、膠着状態に陥った。こうした時、教師はひとつひとつを決めていくための手順などを助言した。かれらはこうして司会の進行方法を学び、なかには司会が面白いという学生もあらわれた。



記録係は、授業中に出た意見をまとめて記録し、それを翌週の授業の前に私の研究室に提出することが決まりとなっていた。私はその記録用紙を学生の人数分コピーして、全員に配布することになっていた。記録係になった学生は、こうして記録の方法を学んでいった。さらには、この記録を作成するために生まれてはじめてコンピュータを使ったという学生もいた。必要に迫られることが、技術修得のための早道である。

学生にあらかじめ言っておいたことは、前の司会者や記録係より先上手くなるように、ということであった。これはかれらの向上心を喚起する上でとても大事な一言である。学生はお互いをライバルとみなし、向上心が煽られるのである。学生どうしお互いを触発しあいながら学んでいくことが、学生主体型授業の真骨頂である。

市中のホールを借りて、市民を対象に有料の発表会を学生主催で実施した。昨年と同様に、夏休みに入った直後の8月2日に300人収容のホールを借り、入場料を300円とることが決まった。こうして本授業の学生は発表会に向けてのポスターやチケット、スポンサー探しなどで多忙になっていった。もちろんこうしたことも授業時間外の放課後や休日に行なわれた。



教師は昨年度にゼロの状態から発表会の実施までを経験しているので、精神的にゆとがかった。だが、それかと言って、学生の準備状況がスムーズだったわけではない。学生の側は

すべてが初体験だったのだから。

発表会は、昨年度の5割増しの150人近くの観客が集まった。観客動員は、教師によるところが大きかった。学生には親や兄弟に来てもらうように言い、なかには東京などの遠方から両親が来た者がいた。また、学長と副学長には招待券を贈り、学長夫妻と副学長が観に来てくれた。こうして、発表会は大成功に終わった。



次に、各班の活動を少し見ておこう

ディベート劇は、学生がディベートのテーマを決めてシナリオを作成し、それを劇にして発表する。その過程のなかで、オリジナルなシナリオを作成することがかなり困難をきわめた。そこで我々2人の教師が、台風の接近する夜10時近くまでディベート劇班の学生と一緒にシナリオをつめていった。シナリオができて、劇にしていく段階においても、一人のメンバーが上がり性でそれを克服するのに大変だった。発表会当日までその心配を払拭することはできなかったが、その学生は見事に演じきった。彼にとっても大きな自信になったようだ。



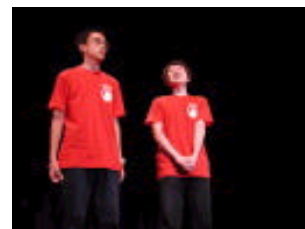
ビデオ映画班は、最初から最後まで4名でグループの結束も強かった。しかし、誰もビデオを撮影したことや編集したことはなかった。かれらからの要望により、昨年度の本授業のビデオ作品を鑑賞することになった。かれら一同はその質の高さに驚き、自分たちも頑張っている作品をつくらなければと奮起した。その心意気で、中間発表の際には1分間の作品のために4日間徹夜したそうである。だが、全員からの評価はとても低いものだった。発表会の2週間前に行った最終点検においても、作品のときは惨憺たるものであった。このように発表会前に、かれらはほとんどなすすべのない状態だった。だが決して投げやりにならず、発表会の当日まで全力投球をして、最終的な発表作品は観客からとても高い評価を受けた。

演劇班は、高校生のときに演劇部だったものが数名いて、彼女たちが発声法の練習の初歩からリードしたので、安心して見ていられた。またこの班には、昨年度の履修生であり、現在、大学の演劇研究会にも属している先輩がいたので、教師側が作品の出来具合をそれほどチェックする必要はなかった。たしかにかれらはよく練習した。



どの班も必死に頑張っているなかで、ひとつでも努力していない班があると授業全体の士気にかかわる。だから見てもいいかげんそうに見えるネーミングの班が「カレー班」である。そこで、かれらにはコンパの際に、カレーを作らせみんなで食べ比べて品評会を行うことにした。2回のコンパの際に、かれらはそれぞれ5種類のカレーを作り、全員に食べてもらってアンケートをとった。こうして「カレー班」が頑張っていることは全員の周知するところとなり、学生の不満の声はおこらなかった。

「お笑い班」は最初から最後まで1名であった。「演劇班」からの勧誘などもあったが、他の授業から相方を探してきて、漫才の発表にまでこぎつけた。何度か中間発表などを行ったが、かれらの創作コントはいずれも素晴らしいものであった。発表会本番のでも観客に絶賛された。



本授業の「学生による授業評価アンケート」の総合評価は、5点満点で4.45と高い評価を得た。学生個々の意見を聞くと、多い意見として「人間関係の勉強になった」ということであった。かれらが活動したそれぞれの班は出身地も高校も違った若者たちから構成されていた。かれらは作品作りという共通目標のために、人間関係を構築することにかなりの努力を払い、それが勉強になったというのである。今回のような共通目標がなければ、日常的には、お互いに表面的な付き合いをしていけばいいだけだと言うのである。いくら軋轢が生じようと、かれらは目的に向かってそれを克服するように努力したのである。こうしてかれらは、本授業の「コミュニケーション能力」や「協調性」、「社会性」を身につけていったという。

履修者のなかには、高校生の時に生徒会長や学級委員となって文化祭や各種の催し物のリーダーを経験した者がいた。また、ボーイスカウトの指導者として全国レベルの行事を指導していた者もいた。だが、そうしたかれらの経験も今回の発表会の企画・立案・運営をするうえでは十分ではなかったようだ。かれらがすべてをリードしきれたわけではなかった。今回の授業を通して、企画・立案・運営に自信を持っていたかれらは、高校までの活動がどれほど教師や親やおとなに支えられていたかを、思い知らされたと言う。そしてかれらは今回の授業を通して実践的な「企画・立案・運営」のノウハウを学んだという。

本授業はグループ活動を中心とした学生主体型授業として設計されている。履修者数は昨年度の30人から40人という人数に増えた。一般的に、自由度の高いこうした授業において、学生数が増えると教師の負担が増し、授業を制御できなくなる心配があると考えられている。しかし、40人程度では決してそんなマイナス面は生じない。逆に、今年のほうが人数の増加によって授業全体のアクティビティが上がった。今回のような授業で履修者数が20人以下だと、かえってアクティビティが落ちるであろう。このように学生主体型授業は少人数でないといけない、というのは間違いである。グループ活動を取り入れることによって、かなりの学生数の授業を運営できる。そのために

は、グループ内に班長を置くなどの工夫はもちろん必要である。

学生主体型授業の様々な形態のなかにあつて本授業の特色は何かというと、それは市民を対象にした有料の学生主催の発表会にある。この授業で学生はなぜ必死に努力するかというと、それは発表会があるためである。市民に見せるといことで、素人ではあつても、作品の質を追求していったのである。発表会本番の2週間前には、他人には見せられないような低いレベルの作品もあつた。もし今回の発表会がなければ、「これこれの問題はあるけれども、よく頑張ったね」の教師の一言で終わっていただろう。しかしかれらにとつても作品を市民に見せるということとはとても重要なこととして位置付けられていたのだ。学生には学生のプライドがある。それゆえ、かれらは試験期間中にもかかわらず、夜通してより良い作品を追求しつづけたのだ。



この授業の発表会は、「開かれた大学」の実践例ともなつている。発表会の市民の感想は、「若者も捨てたもんじゃない」、学生も頑張っているんだ」、半年でここまでできるなんて、大学生の秘めた能力はすごいね」というものであつた。発表会によって、若者に対して日頃抱いているマイナス・イメージがいっぺんに払拭された。これは驚くべき効果であつた。こうした意見は学内の教職員からも聞かれた。

発表会を観に来た学生の親は、頑張っている我が子を見て本当にうれしかったようである。そこには世間一般で言われている大学生のイメージとはかけ離れた、全力投球の我が子とその友人の姿があつた。

観客の学生からは、「同じ年代の者がこんなに頑張っているので、自分も頑張らなければ」という声が多かつた。私はこれを「エコー効果」と呼んで、他の授業では得がたいような教育効果であると思つている。

発表会の効果はこればかりではなかつた。最近、他のグループの学生たちと研修旅行に出かけた時のことである。私の提案で急遽ディベートをすることになった。おそらく誰もディベートを知らないだろうと思つていたが、かれらの数人が「自分を創る」の発表会に行きディベート劇を観たといふ。そこでかれらのなかですでにディベートのイメージができていたので、すんなりとディベートを実践することができた。このことは、発表会を使って様々な知識や方法などを学生の間で伝達できることを私に発見させた。

以上のように、不特定多数の市民や学生に開かれた発表会は、大学教育の中でたくさんの可能性を秘めた教育方法である、ということがわかつた。



発表会を終えた後の学生の表情は最高である。それは大きなイベントをやつて終えた解放感と、達成感そして自信に裏打ちされたものだろう。我々教師は、授業を運営するだけでなく、学生にこの日の達成感と自信を持たせるために、自身の意欲を高めていたのである。本授業の具体的なかつ最終的な教育目標は、まさに学生の達成感と自信を付与することにあつたのだ。こうしたことは、この授業を実施してみ始めてわかつたことである。授業は実践の場であり、発見の場である。

ひとりの履修学生が言つた。高校生の時、大学生は有り余る時間があつて、ボーと過ごしているものだろうと思つていた。だけど、この授業のために高校生の時よりはるかに忙しくなつてしまつた。この授業では、多くのことを自分で決断しなければならなかつた。自由という言葉は魅力的でこの授業を選択したけれど、こんなにも責任が生まれるなんて想像できなかつた。シラバスには「学生が主役だ」と言いましたが、それが勝手に放題といつわけではありません。主役には重い責任がのつてきます」と書いていた。

もうひとりの学生が言つた。「カナダの大学に行っている友人に、学生たちが企画・立案して運営するこの授業をメールで紹介したら、その友達からカナダの授業はそんな授業ばかりで、日本のような一方的な講義なんかはない、と言われてしまつた」。この話によって、私はこの授業の実践に確信と勇気を与えられた。

